様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １４ 日現在

機関番号：１１５０１
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2020～2022
課題番号：２０Ｋ２２２０８

研究課題名（和文）特別支援学校教師における実態把握及び授業設計に関わる思考様式に関する研究

研究課題名（英文）A Study of Thinking Styles of Special Support Schools Teachers in Assessment and Lesson Planning

研究代表者
池田　彩乃（IKEDA, Ayano）

山形大学・地域教育文化学部・准教授

研究者番号：７０８７８４７０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,900,000円

研究成果の概要（和文）：自立活動の指導における教師の実態把握の観点を明らかにするとともに、授業の目標や内容を導き出すまでの一連の思考様式について検証し、その特徴や背景要因を解明することを目的とした。自立活動に関して専門性が高いと考えられる特別支援学校教師10名に対するインタビュー調査を実施した結果、対象教師は働きかけに対する反応や日常生活の行動等を丁寧に観察し、さらにその背景要因について仮説をたてながら実態把握を行っていることが明らかとなった。また、そのような思考様式に至る過程において、全ての教師が訓練会や研修会等への参加や書籍での勉強、教職大学院への入学等、長年に渡り自己研鑽を重ねていることがわかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
自立活動の指導においては、学習指導要領等において各教科のように目標や内容が示されておらず、指導にあたる教師が児童らの「指導すべき課題」を導き出し、目標や内容を設定する。今後は通常の学級においても、自立活動の指導が重要な役割を果たすことが想定されるものの、教師が児童らの姿からどのような観点で課題を抽出し、授業を設計しているかについては、明らかにされてこなかった。通常の学級においては自立活動の指導は新たな指導領域であり、その方法論や手続きの整理が求められている。本研究において得られた成果は、通常の学級を含めた全ての教師が身に付けるべき授業力について解明する一助になると考える。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to clarify teachers' perspectives on assessment in independent activities and to examine their thinking styles in determining the goals and content of independent activity lessons. As a result of an interview survey of 10 Special Support Schools teachers with high expertise in independent activity, it became clear that the teachers carefully observed the reactions of the students to their encouragement and their daily activities, and furthermore, they made hypotheses about the background factors in their assessment. In the process of developing such a way of thinking, we found that all of the teachers had been studying themselves for many years by participating in training sessions and workshops, studying books, and enrolling in graduate schools for teachers.

研究分野：特別支援教育

キーワード：自立活動　思考様式　実態把握　特別支援学校教師

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

教師の授業力をいかに担保するかが問われる中，特別支援教育においては，個々の幼児児童生徒（以下，児童ら）の障害の状態や特性及び心身の発達の段階等を含めた実態を適切に把握する「実態把握」が非常に重要となる。特に自立活動の指導においては，学習指導要領等において各教科のように目標や内容が示されておらず，指導にあたる教師が児童らの「指導すべき課題」を導き出し，目標や内容を設定する（文部科学省，2017a)。つまり，指導にあたる教師がいかに適切な実態把握を行い，指導すべき課題を導き出すのかが児童らの「何を学ぶか」を規定するのである。ところが，児童らの障害の状態や程度は多様であり，的確な実態把握及びそれらに基づいた適切な授業の実現は容易ではない。また，児童らの実態把握は，教師の教育観や指導観，経験等にも影響を受けやすく，同じ児童らを見ていても，その捉え方には相違が見られる。実態把握に相違が見られるということは，それらに基づいて設定される目標，内容，評価においても相違が生じるということである。指導の継続性や他教師との共通理解の困難さを招き，このことが「担任教師が代わると指導が継続されない」「共に学級を運営する同僚教師と異なった対応をしてしまう」等の問題として長年指摘されてきた。

学習指導要領（文部科学省，2017b）において，通常の学級に在籍する障害のある児童らにおいて，通級による指導を行う場合には，自立活動の内容を参考とした指導を行うこと，またその際に各教科等との関連を図ることが明示された。今後は通常の学級においても，自立活動の指導が重要な役割を果たすことが想定されるものの，通常の学級においては自立活動の指導は新たな指導領域であり，その方法論や手続きの整理が求められる。これまで実践を積み重ねてきた特別支援学校の取り組みが多くの知見を与えることになるだろう。多様な教育的ニーズを持つ児童らに対して，特別支援学校教師はどのような観点に着目し，どのように指導すべき課題を導き出しているのか。特別支援学校教師の授業設計に関わる思考様式（佐藤ら，1990）を包括的かつ重点的に探究することは，今後，特別支援教育に関わる全ての教師が身に付けるべき授業力について解明する一助になると考える。

教師の授業に関わる思考に着目した研究は，小・中学校の教師を対象とし，教科指導を中心に行われてきた 。一方で，特別支援教育に関わる教師とその授業に着目した研究はあるものの ，その数は少ない。また，両者はいずれも授業の実施や評価・改善に焦点を当てており，授業設計前の実態把握や授業設計に関わる思考様式は明らかにされていない。

２．研究の目的

本研究においては，特別支援学校教師の授業設計に関わる思考様式を包括的かつ重点的に探究することを目的とした。具体的には，障害のある児童らに対する教師の実態把握の観点を明らかにするとともに，指導すべき課題，授業の目標や内容を導き出すまでの一連の思考様式について検証し，その特徴や背景要因を解明する。

３．研究の方法

（１）対象

「自立活動に関して専門性が高い」と考えられる肢体不自由特別支援学校教師 10 名を対象とした。「自立活動に関して専門性が高い」と判断した選定基準は，以下の通りである。

①自立活動の指導を 10 年以上実践した経験がある。
②肢体不自由をはじめとした様々な障害種の児童生徒に対する自立活動の指導を実践した経　　験がある。
③校務分掌の自立活動部や支援部をはじめとした自立活動に関係する役職に携わる等，校内において自立活動を中心的に担った経験がある。
④学会発表や学術論文投稿など，実践や研究成果を公表した経験が複数回ある。

（２）手続き

選定基準を満たす教師に対し，半構造化面接を実施した。面接は web 会議システム（Zoom）を用いてオンラインで実施した。時間は 60 分から 90 分程度であった。面接調査のやり取り（動画）を録画し，動画から音声データを抽出し，文字化して分析した。

（３）質問項目

主な質問項目については，以下の通りである。

①プロフィール（年齢，教職経験年数，これまでの自立活動の指導経験について）
②実態把握の観点について
・事前に収集する情報
・自立活動における実態把握の際に観察する視点
・上記視点に着目する理由や背景（経験・教育観・知識等）

（４）分析方法

実態把握の観点について，得られたデータを，田中・奥田・深田(2022)を参考に以下の手

続きで分析した。
①記述内容を１文につき１つの意味内容となるように分け，番号を付与する（切片化）。
②似た意味内容の切片同士をまとめる（小カテゴリーの生成）。
③②で生成した小カテゴリーを似た意味内容同士でまとめる（カテゴリーの生成）。

４．研究成果

（１）事前に収集する資料について

事前に収集する資料としては，過去の担任からの情報，発達検査結果，保護者からの情報（聞きとり，連絡帳，面談の記録等），個別の指導計画・個別の教育支援計画，学びの履歴（通知表や各学校の書式に従ったもの），前任者からの引き継ぎ資料が挙げられた。

（２）実態把握の観点について

実態把握の観点については，生成されたカテゴリー，小カテゴリー，具体的な内容，主な発言についての一覧を表１に示した。以下，カテゴリーについて【】，小カテゴリーを＜＞で表記する。

表１　実態把握の観点

カテゴリー	小カテゴリー	内容	主な発言
感覚器官に関わること	反応	・刺激への反応 ・働きかけへの反応 ・基礎感覚（触覚，固有覚，前庭感覚等） ・視知覚 ・聴知覚	例えばちょっと場面があったとき，そういう反応があったら，変わったことは分かるんだなとか，何か刺激受け取ってるんだ。 ・私が視線の先の物を動かしたりして，どうそれを追ってるのか ・揺れとか音とか，そういう好きそうな刺激は何となく経験通して分かるようにはなってきてるので。それを出してみて，どういう反応するのかな ・重度の子でも返し方が的確に返せる子となかなか難しい子といるので。その子に応じた反応から読み取っていくという感じですね。 ・ちょっと実際に音の反応を見てみたりとか。何か直接本当にそのものを。ものもいろいろ見やすいものとか見づらいものとかもあったりするので，この色だったらどうだろうとか。この光だったらどうだろうみたいなところでやってみたりとか。音も，音の高さ変えてみるとか。高い音だったらどうかなとか，この音どうかなみたいなのはやったりとかというのはあります。
	認知	・因果関係の理解 ・マッチング ・指示理解 ・物の出し入れ ・始点終点の理解 ・期待反応	・マッチングとか，学習がちゃんとできてからなわけですけど。はい，あとは，どこの感覚受容をして，どういうふうに動くかとかっていう。どっちが得意かとかね。よくいうあの視覚なのか，聴覚なのかとか，どっちが得意なんだけど，反対側の，例えば，視覚が実は得意なんだけど，聴覚にすごい引っ張られやすいとか，ところかなと思いますね。
身体に関わること	動作	・困難な動作とその背景要因 ・歩き方 ・活動に合わせた動作 ・手の使い方 ・粗大運動の発達段階	・その気になる行動の背景ってどんなことがあるのかなっていうのをいったん少し冷静に考えてみようっていうような状態には今はあるかな ・重度のお子さんとかを知るときの切り口なんだよね，体から入っていくっていうのが。
	姿勢	・座位姿勢 ・手を伸ばしやすい姿勢	・次の時間を想定して，この子がどういう風な姿勢にいられたら，もっと先生に注目できるよな，とか友達の声が聞けるよなってとか，そんなことでやっています。もちろん，まあ排痰とか，そういったところが，ウエイトが大きくなってしまえば，少し呼吸がしやすいような支援をしたりということもある。
	ボディイメージ	・自分の身体への意識 ・動作への意識	・何かやるにしても，自分の身体分からない，体が分からないっていうぐらいの子なのかな。それとも何かその辺は分かってて体動かせている子なのかなという辺りを，ちょっとこう意識して見ているというところはありますね。 ・例えばちょっと分かるような子だったらば，背中に文字書いてみて，それで「分かる？」とか。何か手にこう何か書いてみて「これ分かる？」というような，そういうことだったりとか。
関係性に関わること	コミュニケーション	・コミュニケーション手段 ・意思表出の手段 ・要求の有無	・コミュニケーションを見てると言いながら，そういう，一つ，コミュニケーションの手段となる，発話はあるのかなとか，表出言語とか，逆にこちらからの働きかけに関してどれぐらい受容してるのかなとか。
	自己と外界の理解	・自己理解 ・外界との関係性	・主に子どもの自己，自分のことと，あとは外界に対してどのような状況にその子があるのかっていうこと。 ・外界については対人性，対物性，環境とかっていうのをイメージしてその中の関係性とかも確認しながら自己と外界の関係性とかを確認するようにしてます。
学習に関わること	学習への指向性	・活動への意欲 ・学習姿勢	・基本的に勉強するスタイルが確立されてるなとか。 ・何か先生が教材出し始めたなと思ったら，そろそろ何か始めるなってこう，ちょっと心拍が上がってきたりとかするんだったら，それをやっぱ学習へのやっぱり向き合い方が少しこう，やっぱり積み重なっているのかなっていうふうには見させてもらったりするんですけど。 ・教材とかを提示した時に，なんとなく先生がやろうとしてるってことの意図が分かるのかなとか。
	各教科等の学習状況	・各教科の学習状況	・国語でいえば言語性の部分はもちろんですが，文字の書き方の特徴だったりとか誤字しやすさとかで，子どもがどういうふうに字を捉えているとかっていう知覚の部分の特徴とか傾向みたいなのを見ていったり。

実態把握の観点について，【感覚器官に関わること】【身体に関わること】【関係性に関わること】【学習に関わること】の計４つのカテゴリーが生成された。

【感覚器官に関わること】には，刺激への反応，働きかけへの反応，基礎感覚（触覚，固有覚，前庭感覚等）等の＜反応＞および因果関係の理解，マッチング，指示理解，期待反応等の＜認知＞が挙げられた。【身体に関わること】には，困難な動作とその背景要因，歩き

方，活動に合わせた動作等の＜動作＞，座位姿勢，手を伸ばしやすい姿勢の＜姿勢＞，自分の身体への意識，動作への意識の＜ボディイメージ＞，【関係性に関わること】には，コミュニケーション手段，意思表出の手段等から＜コミュニケーション＞，自己理解，外界との関係性の＜自己と外界の理解＞，【学習に関わること】には，活動への意欲，学習姿勢の＜学習への指向性＞と各教科の学習状況の＜各教科等の学習状況＞が分類された。

（３）着目する理由や背景（経験・教育観・知識等）

対象教師全員が，自立活動に関する何らかの指導法について自主的に研修を行っていることがわかった。動作法や静的弛緩誘導法等，長年肢体不自由特別支援学校を中心に児童らの身体の動きに関わる指導法として用いられてきた手法を勉強し，訓練会等の研修を積み重ね，児童らの動きや行動の背景に関わる観点を身に付けていることが明らかとなった。例えば，「動作法が自分にはあの考え方が合っているなという風に思っていて，最初の子どもの実態から，生活までを見て，ボトムアップで考えていくということができる方法のひとつなので，そういった考え方を参考にして。まあ，そういった指導方法を勉強することができたことで，活用できるようになってきたという感じですかね。」等の語りが得られた。

また，大学院や各地域における自主的な研究活動に参加することで，実践をまとめる力を身に付け，実践の理論化をはかっていることが多くの教師から語られた。具体的な発言としては，「勉強して，なんでこんなに，なんとなく感覚で分かったことが，こんなに…何て言うんですか？整理されているんだということかなって思います。」「勉強しに行って，学校戻って，担任してる子が，「あ，そうか」って言って，また開いてみるみたいなことがあったのかなと思います。」等の語りが得られた。

（４）まとめ

対象教師は肢体不自由児に対して，働きかけに対する反応や日常生活の行動等を丁寧に観察し，動作の困難さを見いだしていた。さらに，その困難さが何に起因するのかという背景要因について，様々な仮説をたて，検証しながら多面的に実態把握を行っていることが明らかとなった。また，そのような思考様式に至る過程においては，全ての教師が訓練会や研修会等への参加や書籍での自主的な勉強，教職大学院への入学と研究成果の発表等，長年に渡り自己研鑽を重ねていることがわかった。

引用文献

文部科学省（2017a）特別支援学校教育要領・学習指導要領解説　自立活動編（幼稚部・小学部・中学部）.

文部科学省（2017b）小学校学習指導要領.

佐藤学・岩川直樹・秋田喜代美(1990)教師の実践的思考様式に関する研究-1-熟練教師と初任教師のモニタリングの比較を中心に.東京大学教育学部紀要,30,177-198.（本研究においては，佐藤ら（1990）を参考に，教師が自らの知識や経験等を活用しながら児童らの実態を把握し，授業を設計するまでの一連の思考を「思考様式」と呼ぶ。）

田中美菜江・奥田玲子・深田美香(2022)食支援で大切にしていることおよび課題に関する自由記　述の分析 - 特別養護老人ホームにおける食支援の実態調査から - . 鳥取看護大学・鳥取短期大学研究紀，84，13-23.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計6件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 池田彩乃・内海友加利・安藤隆男・山根紘子・林留美子・八柳千穂・阿久津百子・原千咲季・分藤賢之
２．発表標題 自立活動の本質に迫る個別の指導計画の在り方Ⅰ　今後の特別支援教育における個別の指導計画の意義
３．学会等名 日本特殊教育学会第59回大会自主シンポジウム
４．発表年 2021年

１．発表者名 内海友加利・池田彩乃・安藤隆男・有井香織・植田佐知子・大川木綿子・三嶋和也・藤井和子
２．発表標題 自立活動の本質に迫る個別の指導計画の在り方Ⅱ　小中学校への展開を踏まえた手続きの提案
３．学会等名 日本特殊教育学会第59回大会自主シンポジウム
４．発表年 2021年

１．発表者名 池田彩乃・有井香織・内海友加利・安藤隆男
２．発表標題 特別支援学校における個別の指導計画を通した授業改善Ⅰ－「個別の指導計画モデル」における個別の指導計画作成システムの検証を通して－.
３．学会等名 日本特殊教育学会第58回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 有井香織・池田彩乃・内海友加利・安藤隆男
２．発表標題 特別支援学校における個別の指導計画を通した授業改善Ⅱ-「試行的授業による即時的フィートバック」「授業システムへの接続」の検証を通して-.
３．学会等名 日本特殊教育学会第58回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 内海友加利・池田彩乃・橋本陸・安藤隆男
２．発表標題 小中学校等における特別支援教育の質保証に向けた個別の指導計画のあり方Ⅲ－個別の指導計画作成に係る地方教育行政提示資料の現状－.
３．学会等名 日本特殊教育学会第58回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 池田彩乃・内海友加利・安藤隆男・有井香織・友部道夫・菅野和彦
２．発表標題 養成・採用・研修の一体化を通した特別支援学校教師の 専門性向上の在り方Ⅰ ～ 現状と課題の整理
３．学会等名 日本特殊教育学会第60回大会自主シンポジウム
４．発表年 2022年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関